

福田恆存の『マクベス』受容
— 「マクベスについて」から「明智光秀」へ—

今回の研究発表では、報告者の研究課題「昭和期日本の政治・社会・文化システムの変遷—福田恆存の『政治と文学』論—」の一環として、終戦直後の福田の残した「批評」から、1950年以降、福田が本格的に取り組んだ「演劇」への展開に迫るため、福田の『マクベス』受容を取り上げた。

「マクベスについて」(『批評』、9巻1号、1947年4月)は、福田自身、後年、主人公「マクベス」を作品『マクベス』の外に連れ出して論じた「失敗作」だと振り返る論考である。一方で、「マクベスについて」には、1947年当時の福田の人間像が、「マクベス」を「一介の力なき凡人」として批評することで示されている。「マクベス」に託された「人間」の「弱さ」は、福田の「政治と文学」論の原点にある人間観に通じるものと思われる。本発表で、「マクベスについて」を取り上げた理由は、この点にある。さらに、福田の『マクベス』解釈の具体的な表れである「戯曲 明智光秀」(『文藝』、14巻6号、1957年3月)への展開を追うことを試みた。具体的には、以下のような点を指摘した。

(1) 終戦直後の福田の「政治と文学」論の原点には、「人は完全に孤立した個人的自我でありえぬと同時に、集団的自我のみをもつて割り切れる存在でもない」(福田恆存「危機(政治と文学)」、『文学時標』、8号、1946年5月)という言葉に表れる、人間の二元性への注目があつた。

(2) 「マクベスについて」での、ブラッドレーの「魔女」解釈に対する言及を通して、「外的」な「運命」と「内的」な「自由意思」との間で翻弄される、主人公「マクベス」の「弱さ」を、福田は強調している。この点は、福田の「政治と文学」論に見られる、「集団的自我」と「個人的自我」の対立という発想に重なる。

(3) 福田は、「マクベス」を「一介の力なき凡人」と規定することで、「運命」と「自由意思」の間に生きる主人公「マクベス」の「弱さ」を表現している。ここで、「一介の力なき凡人」という「マクベス」像は、「近代理智のひとつの態様」である「デクリネーション」を示すものであるという、福田の議論に言及した。

(4) 「戯曲 明智光秀」での、「妖婆」と「臯月」(「光秀」の妻)とが「一人二役」であるという点は、福田が「マクベスについて」で指摘した、「外的」な「運命」と「内的」な「自由意思」の間で翻弄される主人公のあり様を、より強調して表現している。その上で、「光秀」が、「妖婆」と「臯月」に対して、対照的な言動を取っている点を、「明智光秀」の第4幕第2場を例として紹介した。

(5) 今回の発表のまとめとして、福田が「マクベスについて」において、ブラッドレーに言及したことの意味、同時代的な意味、「マクベスについて」から「明智光秀」への展開という構図を確認した。

(質疑応答)

司会の長谷川詩織氏(文芸・言語専攻)より、本発表の概要がまとめられた後、指定討論者の、伊藤秀明氏(国際日本研究専攻)、松本秀昭氏(哲学・思想専攻)より、質疑・コメントを頂いた。伊藤氏からは、「戯曲 明智光秀」の内容についての質問、松本氏より、福田の「政治と文学」論と「マクベスについて」での、用語上の質問を受けた。その上で、フロアとの議論に移った。質疑・コメントの内容は以下の通りである。

(1) 発表者自身の『マクベス』、『明智光秀』にたいする感想。(2) 福田の思想形成について、福田の発想源はどこにあるのか。具体的には、今回の発表の引用文からも、ニーチェやハイデガーなどドイツ思想からの影響が感じられるが、そういった影響関係はあるのか。(3) 今回の発表とこれまでの発表とのつながり。具体的には、福田の芥川論、D・H・ロレンス論の際に、発表者が言及していた、福田の「民衆」像と、今回の「マクベス」像にはつながりがあるのか。

(感想)

発表者が研究課題として取り組む、福田恆存は、文学評論、創作をはじめ、政治、社会評論に至るまで、多方面で評論活動を展開した。また、文学に限定しても、その批評対象を挙げれば、D・H・ロレンス、シェイクスピアから嘉村礒多、さらには、サルトル、チェーホフなど、幅広い。発表者自身、福田を出発点として、福田の批評対象と出会っている面があることは否めない。今回、発表者の『マクベス』、『明智光秀』などについての感想を尋ねられたが、発表者自身の感想を述べながら、福田の提示する見方から受けた影響を改めて感じた。その上で、福田の活動の幅広さには、研究上の様々な可能性があるといったことも、今回頂いたコメントの中で再認識できた。

しかしながら、現状では、深めるべき課題が数多くある。今回質問を頂いた、用語、内容上の問題はその一つである。また、福田が、「政治と文学」論や「マクベスについて」の中で、「個人的自我」と「集団的自我」という問題を考える一方で、同時に、これらの「批評」は時事的発言でもあった。こうした「同時代」との関わりは、より限定的に調査し、考察すべきものであると考えている。さらに、「戯曲 明智光秀」への展開も、福田自身の、「批評」という「方法」から、「演劇」への変化のプロセスとして、より深めていくべき課題であると考えた。今回、得ることのできた多くの課題を解決しながら、論文の執筆につなげたいと考えている。最後に、質疑・コメントを下さった方々、および、本発表の機会を与えてくださったことに、謝意を記したい。